特別講演

「私の仕事と山への思い」

講師　日本エアシステム
青森営業支店長　芦　沢　吉　朗

ご紹介していただきました芦沢でございます。只今は「先生」という言葉を頂戴し、こんな浅学、非才な男を「先生」つきでご紹介いただきまして非常に戸惑っております。本来、諸先輩方を前にして、だいそれた話は出来ませんが、私は長い間ヘリコプターの仕事に携わり、皆さん方とご一緒に山で多くの作業をして来ました。航空会社といえば定期旅客機を飛ばす航空会社が日本には数社ありますが、その他にも３７～８社も知られていない航空会社があります。しかも、その航空会社に働くほとんどの人達は、非常に低賃金の中で、今も頑張ってくれております。そういう仲間のためにも、私は敢えて、今日ここの場に上がらせていただきました。

さて、私が青森に来まして今年で７回目の冬を迎えますが、新空港になるまでは、青森に雪が一杯降りますと、今日は飛行機が降りるのか、降りないのかということを心配でありました。しかし今では一般的な知識として皆様に聞いていただきたいと思いますが、冬の就航率は、ほぼ９８％以上でありますので、どうぞ飛行機をご利用なる方は、そんなにご心配ならないで、青森空港の方へ行ってご出発して下さい。むしろ、６月～７月の梅雨期に霧が発生して就航率が落ちて困っております。しかしながらこれも新しい自動着陸装置が開発され、来年あたりから着手しますが、現在のところは、雲の高さの縦が２００ｍ、横が８００ｍ以上の視程があれば着陸できます。それがミニマムビローなので、ビローになれば着陸できないということになりますけれども、その条件がもっともっと緩和されるような機械が装置されます。これは縦が１５ｍ、横の視程が６０ｍ程度で着陸できますことから、増々、空の便が皆様の足になる時代が来ていると言えます。これは本来の主題ではありません。

そろそろ私が山との係りについて申し上げることに入ってまいりましょう。私

は昭和１１年の生れで、子供の時に終戦を迎えました。３０年に高等学校を卒業しましたが、そのまま大学に入れずに、２年ばかり遊びまして３２年に大学に入りました。当時、慶応大学ＯＢの槙有恒氏がマナスルへ登ったということで、始めてアルプスからヒマラヤへと山登りが変わるという新しい山登りの風潮になりまして、若者達は皆んな登山家になろうと、山岳部に入った時代です。私も山へ登りたくって、山に登るためにはどこに行ったら一番入りやすいのか考え、どうしょうもない文学部の演劇科に入りました。入ったら女の子ばっかり目につき、これはまずいと思いました。大学に行っても女学校に行ったような気分でしたが、その間、殆ど山に行ってたのでどうでもよかったけれども、当時、女の子がタバコを吸うことをあんまり見受けられなかった時代ですから、学校へ行ったら「女だてらにタバコを吸って、なんていう奴等だ」と思わせるひねたやつもいました。結構、その分野で活躍している者もおりまたし、とんでもない事件を起こした者もおります。かくいう自分も、いい加減な学問を修めて学校を卒業したことは今も悔やんでおります。

そいうことから、遊びとして山との係わりを持ったのですが、ご多分に漏れず文学部を卒業したのでは就職がなく、機械屋の小僧になりました。そしていつでも会社を辞めてヒマラヤに行ける用意だけはしておりましたが、そんなある時、友達が私のところへ来て、「お前、航空会社に行かないか」という誘いがあり、それはうまい話だと思い名前も知らない航空会社に行くことを決め、富士航空というところを尋ねました。富士航空の親会社は東急電鉄でありました。当時電車会社が大体線路を敷き詰め終え、それ以上電車会社が発展がないという考えで皆んな空に目を向け始めました。東京では私が入社しました富士航空が東急で、東日本航空は東部鉄道、西部鉄道は皆さんご承知の朝日航洋、その他に富士空輸が富士急行、また、関西では阪急電車が阪急航空、近畿電鉄は日東航空というように電車屋さんがものすごく空に憧れておりました。ご多分に漏れず、どの会社もあまり成功せず、辛うじて残ったのが富士航空やその他数社でありました。当時、富士航空ではアメリカからスコロシキーのＳ６２という１０人乗りのお化けみたいなヘリコプターを、どう間違えたのか購入しまして、東京から軽井沢及び日光へ、ヘリコプターでお客様を輸送したいという夢のような話を実現させましたが、ものの見事に２カ月もやりましたら全然お客様がいなく、たまたま飛べば軽井沢への登山口のところに一杯雲がかかっていて、そこで不時着し、そこから先はお客様にハイヤーを用意するなど、何をやっているのか判らないくらい大赤字出しまして、２カ月でピリオドを打ちました。そんなことから、でっかいヘリコプターをどこに使用したらよいかと考えまして、結局、山のボッカの変わりにアルプ

スの山の上に食料等を上げたりする仕事を何とか見付けたのであります。

そしてここに必要な男は当然自分みたいな馬鹿な男だったのでした。結構ヘリコプターの仕事は、飛行場以外のところに着陸したり、物をぶら下げて飛んだりするなどいろんなことをしますので事前の許可を取るのに大変であります。そのような仕事をするために現地調査などの必要で私が呼ばれまして、当時の富士航空に入りました。従いまして、頭で入ったわけでなく、ただ首から下が丈夫であるということで入ったわけであります。当時は今日のように会社が５，０００人も６，０００人もの社員がいるような大きくな会社となるとは思ってもみませんでした。営業といえば、７～８人しかおらず、全体でも１００人を越すか越さないという小人数の会社でありました。それでも航空会社といえば結構我々若い者にとってはいい気分で入りましたが、入った当初に何をやらせられたかというと、ほとんど空から勝手に撮って来た写真を売りに行ったり、アドバルンを上げているのを逆さにヘリコプターでぶら下げたりするなどくだらないことばっかりやっていましたので、給料を殆ど貰うことが出来ない状態でありました。

しかし、こういった産業に携わる航空事業は、全日空の前身である日本ヘリコプターが、当時、アメリカから小さなヘリコプターを一番最初に購入して来て、水田に空中散布をし、いわゆるイモチ病等を退治したのが、農林水産業に深く関わっていくきっかけ作ってくれたのです。また、林野庁の仕事に関わったのも同じく昭和３６～７年頃でありますが、特に一番最初は、北海道でネズミが越冬するために食料を食べます。その時に毒ダンゴを広い範囲に散布するわけです。１坪に２粒づつ散布するのですが、これがきっかけとなりまして、秋になりますと国有林、道有林、民有林にダンゴを散布し、また、春になれば腹を空かしているネズミを狙ってダンゴを散布し、殺していくわけです。ところがネズミ算とはよく言ったもので、死ぬけれども毎年毎年ネズミ算的に子供を生みまして、絶えることなく仕事が続き、お陰様で今以って続いており感謝しております。でも小笠原諸島で国内に入れてはいけないというミカンコミバイの病原菌を遂に退治することができました。それは虫を殺すというより、虫の精子を殺すという方法で絶滅しましたが、確か、７年位かかったと記憶しております。

私自身も若い頃、青森営林局に出入れさせていただきましたが、当時、計画課の係長さんのところへお邪魔するのが精一杯で、ああいう大きな庁舎に勤めれればいいなと思いながら夜行列車でよく飛んで来ました。特に鰺ヶ沢営林署や深浦営林署には林地除草剤の散布でお世話になりました。当時、笹を退治するためにクサトールという林地除草剤を散布させていただきました。ただ、この地方では、日本サルの北限の生息地ということが問題になりまして、組合の方がヘリを飛ば

してならないということから、暫くヘリが飛べなくてそこに滞在し、魚つりに行ったり、夜、組合の方と一緒に酒を飲んだり、そんな楽しい思いもありまして、ただストがもっと続いてくれればここで遊んでいて、給料、旅費をポッケトに入れれるにと、今でも恥ずかしいことを思いながら過ごしたこともあります。

また、古木の搬出なども行って来ました。これは大きなヘリコプターが活躍するようになってからですが、最初は小さいヘリコプターでやっておりましたが、効率を考えてだんだん大きくし、沢山物を運搬したり、持上げたりということで、時代が進むにつれて大きくなりました。私は、もともと大きいヘリコプターに携わっておりましたから、その最先端をいっておりまして、次々と大きいヘリコプターを利用するような林業の中に組み込んでいただいた歴史があります。

そんな中でも自分の思い出に残るのは、伊豆七島のなかに艀より行かない御蔵島とういう島がありまして、ここで皇室に納めるために大正年代に植えた桑の木がありましたが、それを京都の大覚寺の開寺１，０００年記念行事の花器の台にするため大量に桑の木が必要となり、それを搬出するためにヘリコプターをもって行き、大阪から３，５００㌧の台船をトコトコ引っ張って来て、海上に浮かぶ台船に桑の木を落す作業ですが、１２月にその仕事をやりましたらところ、モンゴルの上空に高気圧が発生しますと直ぐ西風が強くなるということで、船はトコトコと神津島の方に逃げて行き、ようやく帰って来たかと思うと、また、高気圧が発生したといって、また、神津島の方に逃げていってしまい何にも仕事になりませでした。結局、何をしてきたかというと、内緒ですがニオイエビネを盗んで来たのと、ハンコの材料であるツゲの木をヘリで運んで正月に帰り、改めて５月に仕事をやり直しました。このような仕事も自分にとって忘れられない経験だという思いを持っています。

あまり実のない話ばかりをしましたけれど、実は、私どもの会社にとっては一番歴史として残せる足尾鉱山跡の緑化作業があります。昭和４１年から前橋営林局の直轄事業として実行させたいただきました。足尾の見渡す限りの岩の山を空からの緑化作戦を開始したわけです。当時、牧野先生のご指導の元に、我々は、毎日毎日朝６時から夕方の６時過ぎまで、草の種子を播き、木の種子を播き、それからコールタールの薄めたのを撒いた仕事でありましたが、帰りにはヘトヘトになる程の仕事でありました。

しかし、局がやられている仕事というのは実に膨大な計画でありまして、我々が営林局の毎年の年間予算の中で仕事させていただいておるわけですが、これは１００年あっても足りない事業であると感じながら、山を見つめては仕事をしてまいりました。そして、今でもこの作業は他の会社に引き継がれて続いています。

最初岩石の上に草や木を生やせるということはとても考えられないことでありましたが、とにかくウィーピング・ラブグラスやヨモギなどを一杯袋に詰め込んでは、ヘリコプターのドアを開け放しにして、空から花咲か爺さんのごとく手で播きちらし、その後にピッチを播いて止めるという作業であります。ただそれは、草がどこへ飛んで行くのか判らないし、また、枯れてしまうか判らないということで心配でしたが、この広いどこかにあれば、これも又よいというおおらかな考え方にもうなずいたのであります。追肥作業も加えて、足尾の仕事が始りますと約一ケ月位の間はずっと足尾の中で生活をしますが、丁度、梅雨期の前にその仕事を終え、梅雨期を向かえると草の生育がよいということからこの時期に実行することが欠かせません。その時は休みがなく、くたくたになって毎日毎日天気が悪くてヘリコプターが飛べないのを願いつつ、真っ黒になりながら宿屋を出ました。しかし、毎年このような仕事をさせていただきまして、やがては大きなヘリコプターのバッケトの中に草や木の種子を入れて運ぶような時代に入って来るわけですが、それにしてもこの仕事をさせていただいて、１０周年あるいは１５周年の区切りの時には、営林局の皆さんと山を歩きまして、１０数年も経っているのに僅か２～３㎝より大きくなってくれないクロマツをみますが、しかし確実に根を下ろしているのを確認します。このことが自分にとっては一番嬉しい感動させられた仕事の１つであると同時に、私どもの会社にとっても歴史的な大きな仕事の１つであると自負しております。きっと今も足尾の山に行けば自分達が実行した足跡が残っていてくれるのでないかと思っており、これこそが航空機を使った産業だと思っております。これは明日の飯を更に一杯多く食いたいために儲けようという考え方を持っている私どものような軽薄な民間企業ではとても真似の出来ないことであるとつくづく感じており、我々の税金などが、明日の自分達の国のために使われいるということが、間違いのないそしてこれこそ真に仕事をしているんだという思いを今でもしてなりません。

従いまして、自然に対して積極的に取り組んでいる皆さんには本当に心から敬意を表します。環境庁の悪口をいうわけではありませんけれども、「何にもしなければよい、手を付けなければ自然が残る。」というような一部で消極的な取組みしているのを私はこの目で見て帰って来ておりますが、外国、特にパリのブロニューの森は、ただ広いばかりで何にもしていない森のように見えますが、積極的に緑を守る、育てるという素晴らしいことをさりげなく、しかし、しっかりとやっています。勿論、他の地域でもそうですが、木も利用するけれども、育てる、守るということについて、本当に調和をとってやっていることを目の当たりに見ますと、日本人の現実的な考えの方とか、理想だけを求めている人達、そしてそ

れ一辺倒になっている方などの意見ばかりが新聞紙上を賑わしておりますのを見るとき、私は、決してそういったうわついたものではないということを、常々反論しております。

特に当地における白神山地が世界遺産になったことは、大変嬉しいことでもあり、大事なことでもあると思いますが、一方で、営林局の皆さんを前にして私がこのようなことを言うのは失礼ですが、それ以前に、白神山地を守っていただいた皆さんの努力が、もっともっと新聞等のマスコミで取り上げられてもよいのでないかと何時も歯がゆく思っています。また、十和田の奥入瀬は営林局の皆さんが守って来て下さったことで今日に至っておりますが、それが今や環境庁が守っているがごとく認識させられています。これはとんでもないことであり、過去の時代からいままで営林局の皆さんが積極的な自然保護を今に伝えてくれた　今日のある事を知っている者はそれをしっかりと心得えております。白神山地にはスキーを履いて登ってみました。また、十二湖までも歩いてみましたが、確かに、静かないい山であります。けれども、岩崎村から登る尾根道は登山道として残っておりますが、沢から登る登山道は、既に崩壊しております。あのような状況をあのままにしておいて、良いのか、どうか、ここでは自分の考えだけでより申し上げられませんけれども、やはり否あります。そしてここでもやはりこのようなご苦労をしっかりやっている部分が見逃されているのでないかと思います。これから世界遺産になったら、観光業者はもう直ぐ、白神だ、白神だといい、この地を訪れる人は、入るなといっても必ずサクを越えて入ると思います。これからどのような管理をするのか、非常に心配でもあり、また、山を保護することだけでなく、この土地で生活するものにとっては、山を利用しなければならないことも必要です。それから育てることもしなければならないと思います。北欧の国へ行きましたら、ホロホロ鳥は常食としており、鳥も撃って食べていますし、鹿等も捕って食べています。また、山から木を切って家具も作っております。それは人間の生活として必要なことを調和を取りながらやっていることでありますから、この点を十分見習うべきであると思います。青森の観光に携わっている、あるリーダー的の一人が、八甲田山の東側の斜面にリフトをつけたらお客が一杯来るだろうと、なんのためらいもなく放言しています。どういう気持ちで言っているのか理解出来ません。青森の活性化のために観光客をどんどん呼んで、リフトを利用させ、八甲田が賑わえば、青森がもっと豊かになるというミクロの現実的な話でありますが、同時に猛反対、猛反対といって何にも手を付けないことも又極端であり、自然を守るために今我々が考えさせられることが多い今日であります。

このような現象が起きるのも自分なりに思ってみますと、やはり、全て物質文

明の行き過ぎによるための判断の間違いとか、理解の違いがわかることかと思います。昨今のバブルの経済が弾けてしまい、今、ちょうど我々が戒められていると思います。特に民間企業の付和雷同の仕事をしている我々にとっては、この戒めが厳しく、平成３年度は儲かっていましたが、平成４年度には一年で赤字が５２億円も出て、来年度は２００億円を越す赤字が見込まれます。ただ、バブルが弾けた途端に、たった一年で経営状態がおかしくなっているのです。このような根の無い浅はかなというか、軽薄な民間企業がいっぱいある情けないのが日本の現状であります。そして民間企業に働く私は、毎日このことに一喜一優して暮らしているのです。とっても情けないではありませんか。

さて、堅い話はこれぐらいにして、少し肩の凝らない軽薄な民間企業の行っている一端を少しお話します。現在、日本では年間に飛行機を利用する方は、約７，０００万人おります。そして海外には年間１，６００万人ぐらい人が出掛けてくれております。これが今の航空業界のお客様の輸送実績でございます。我々の会社でもなんとなく国際線に乗り出しまして、ホノルルに週に２便、シンガポールに週に４便、ソウルに毎日１便飛んでいます。一番国内でお客様が多く利用する路線は、東京から札幌までの路線です。１年間に全体の一割である７００万人が利用しています。ちなみに青森空港は、今年の３月でおそらく９０万人の方が利用してくれるものと思いますが、私が６２年にジェット空港になった時に来た時は、１６万人しか利用客がおられなっかったがのが、最初にジェットが飛んだ年は約４１万人になりました。現在はその最初の時の倍以上のお客様が飛行機を利用して下さいまして、非常に嬉しく思っております。東京から青森まで約１時間の飛行時間で来ますから、皆様の足の便としては役に立っているのではと思います。東京出て、山形の上空を通過し、青森の電波に向って飛んで来ますのですが、今は、Ａ３００という３００人乗りの飛行機を使用しています。そのＡ３００が１時間に燃料をどの程度消費するかというと、ドラム缶で約３８本消費します。約３００席でありますから、一人当たり丁度、ポリ缶１個を消費する計算になります。いつのまにかこのように資源をドンドン使う新しい時代に生きていて生活を享受していることに、何にも気づかずいる毎日を振り返ると今更ながら何とも凄い世の中になったと考えらせらます。

国際路線では、よくトイレが問題になっていますが、この一種の産業廃棄物というのも変でありますが、重要な廃棄物を例にとりますと、日本を出てホノルルまでに到着する間、お客様が一人がトイレを２．^{3} 回程度使用し、男性は１回に約３００ＣＣ、女性は２５０ＣＣの排泄があるとされています。飛行機の中は気圧は地上の気圧より少し高く、１．^{2} 気圧程度であることから更に若干多く排泄

されるとお医者さんの方から報告されています。それから、飲み物としてアルコール分が加わりますから、一般的なデーターより又更に多くトイレを利用することになるかと思います。その排泄物の処理を、空から撒くのでないかといい加減なことを言う人もおりますが、そんなことしたら地球上が汚くなったしまいしますのでそんなことはありません。ホノルルまでに行くには約４㌧の緑色と空色の合いの子のような色の薬品を積み込みこんで処理をし、匂いが出ないようにして持って行き、バキューム・カーにきちんと積み替え処理をするのです。それにしても実に膨大な量です。又、先ほど青森、東京間はドラム缶を約３８本消費すると言いましたが、私どもの会社ではホノルルまで、三発のエンジンを持ったＤＣ１０という機種を使用していますので、ドラム缶を約４００本消費します。そして１日に日本からホノルルへは毎日約５，０００人の人が行っており、飛行機は１５便も飛んでいます。更に世界の飛行機が一日どのくらい飛んでいるかというと、４，０００機も飛んでいます。天然資源を毎日毎日、飛行機だけでこんなに消費しています。このように大量の資源が毎日毎日消費されていることには、重ねて非常に反省させられることがあると思っております。ホノルルの経済が湾岸戦争で約半分の１日、２，５００人のお客に減った時に、ハワイの経済は全く維持出来なかったという恐ろしい現象が報道されましたが、観光客が５，０００人から２，５００人になったことだけで、世の中の機構がおかしくなってしまうような、行き過ぎた物質社会についても本当に考えさせられます。私どもの会社も遂に今年の６月にホノルル線を止めざるを得なくなりすが、旅行会社も飛行機会社も空気を運んでいたのではどうしょうもないということから、安い運賃でお客を詰め、ホテルはホテルで空部屋を作ってはしょうがないということから、とにかく埋めていく、そのようなからくりの中に入ってしまいまして、安かろうが、何しょうがとにかく詰めていかないと、経済がおかしくなってしまうという現象が起きております。これは、まさしくホノルルに象徴されますように、今の経済のあり方が軽薄な形で急速に動いてしまう現象をみると大きな表れだと思っています。最近の話ですが、ＦＭ青森が募集した日専連のお客でこの間ホノルルへ行っていただきました。その時の話を申しあげますと、新聞のチラシには、某航空会社→青森出発・９８，０００円と記載されていまして、某航空会社が成田から飛んだ私どもの会社の飛行機であったそうで、９８，０００円で４泊５日のホノルルに行けたのです。飛行機の運賃とは何んなのだろう。青森から東京へは片道２１，４００ですから、それに引き換え、いくら割引きしたとしても、９８，０００円で宿賃、食事が付いて、また、飛行機を利用し、更にお土産まで付く旅行に、航空会社が飛行機を飛ばしていけるわけがありません。しかし、私どもの会

社ばかりでなく、他の会社も、このような戦争に巻き込まれて、結局、私どものような会社は全部蹴落とされ、最後に生き残った会社が再び、自分達が生き残れたその証しに高い運賃に持って行こうという策略に外ならないんですけれども、ついに体力のない私どものん会社は、それに負けております。

こういうばかばかしい激烈な経済戦争の本当の姿を見ずに、若い者はそれでも都会に行きたい、大会社に入りたい、都会の中で生活をしたいという憧れを持っているようです。先般、県の統計をみましたら、何故、東京がよいか、都会がよいかというアンケートに若者達は「情報が沢山得られるから」という回答が一番多かったようです。情報の何が多いかといえばテレビであります。テレビのチャンネルが青森では３つよりないけれども東京では１０もあるという。それも民放のテレビのチャンネルが多いということであります。単に情報が多いということで彼等は憧れて行っているようですが、それでは青森等の地方都市のおいては彼等の魅力となるものはあるのかというと、確かに魅力がないと断言をしております。何故ないのかというと、話題性がないからだと言っております。それからこれも大事なことですが安心して働ける場所がない、また、賃金が低いとも言っております。全てが言われてみれば最ものことですが、しかし、考えてみると、先程、飛行機の燃料が４００本のドラムカンをぼんぼんと消費されるような、物質文明に巻き込まれた中の我々の生き方が、それを当たり前として受け止めていることを是だとし、日々の生活を送っている若い者にこれらのことを「間違っている」と言っていない私に責任があるのでないかと思います。特に百年先を見つめて仕事をして下さっている皆さん方からすれば、本当に歯がゆい若者達ばっかりが昨今多く出てきていると思われます。確か数年前にモノレールの終点の世界貿易センタービルの二十数階のところに中華料理屋がありまして、２，７００円のラーメンを食べさせておりました。私はラメーンが２，７００円とは、とんでもないことだと憤りをおぼえましたが、都会の人達はそれを一つの話題だというふうしかとらえないで、憤りも、何にも感じておらないわけです。そういうことがもう都会人の感覚をおかしくしているのでないかと思えてなりません。私は青森に単身赴任で来のですが、直ぐこちらの地が本当に自分に合った理想の地であると思いまして、青森を永住の地と決めました。やはり古女房が作ってくれたおにぎりを持って山を歩くことが、２，７００円のラメーンを食べるよりは、ずっと素晴らしい人生だということを、私だけでなく若い人達が気付いてもらえる世の中を作っていきたいと思っております。更に、私どもがやらなければならないことが、いっぱいありますけれど、地方の企業体制を青森を例にとっても整備されていないのです。こちらではよく方々に私どもの飛行機も乗っていただく旅行を

計画しては、皆をごまかしてとは言ってはなんですが、寒くなれば、沖縄へ行きましょうとか、ハワイへ行ってゴルフをやりましょうとか、調子のよいことを言っては皆さんを集めて行っていただいておるわけです。行って下さる方に対しては誠に失礼なことを申し上げることになるかと思いますが、中小企業の経営者の皆さんが、自分達はご苦労して会社を作って、ようやく安定して来たから、ここらで少し遊んでもよいだろうという気持ちでお出掛けになるのは分かりますけれど、社会保険も付けられないような雇用体制が今だ当然のごとく残っている企業体質の中で社長がハワイでゴルフは、ちょっと問題があるのでないかと思います。そういうことが若者を地方に定着させないのではないだろうかとも思います。

実は、私も大きなことばかり言って、そんなことでは駄目だ、駄目だと言って来ましたが、やってみたら何か出来るのでないかという思いにかられ、一昨年から山小屋を建てようと思い、汚い、ちっぽけな小屋でありますが、山のガイドをしている男をリーダーに、その者の相棒を加えて、現在、３６歳以下の人達１０人ばかりで運営をし、小屋を築きました。大きなことを言って始めたのはよいけれど、お金の掛かること、掛かること、もっともっと安くできれば皆さんに安いお金で楽しんでいただけると思いますが、僅か４～５０人より泊まれない、しかもそれも粗末な、今風の相部屋の小屋を作りまして、県から１億円、国から５千万円借り、更に銀行から１億円借り、また、自分が持っていた会社の株等を全部売る程全財産処分して、３億円位集めましたが、それでもまだ満足した状況でありません。しかしもうバック出来ない状態になってしまいましたので、昨年の１２月に何とかオープンすることが出来ましたが、この苦しい状況が今始まったばかりですから、非常にお金が掛りましてまだまだ採算が取れる状況でなく、この先を計算をしても採算ラインに乗ることが非常に難しいと思いますけれど、彼等に委ね、彼等が自分達の理想とする新しい地方での生き方、青森でなければ表せない生き方、そういう主張を持ちながらここに根付き、やってくれるのであれば、私は、外には何にもいらないと思って情熱を傾けてみました。お陰様で、京都で学校の先生をやっていたのを辞めて来てくれた娘さんとか、東京からユー・ターンして参加してくれた娘さんが加わったり、今地元でスキー学校の先生をやっている青年も加わってくれました。そして自分達が、この地域で本当に生きて行こうという理想を燃やしてくれている者が集まって来てくれました。ただ、お金を借りる際の保証等に関して、若い者はまだ一般的な信用がないことから、私は現在、今の会社におりますので名前は出すことができません。従って家内の名前を使用し、山小屋の借入責任をとっておりますが、やがてこの小屋が一人前に歩き始めてくれたら肩をそっと抜いてやることにしています。

今は冬のシーズンですから、スキーのガイドをやっていますけれど、今までは冬、春よりスキーのガイドの仕事しか活躍することが出来ませんでしたが、今年は、是非、夏のシーズンもよいガイドとして活躍出来るよう今からいろいろことを彼等と話しています。今まで日本では山登りにはガイドがいらないという概念でありましたが、外国では非常にガイドが活躍しておりまして、特に私が経験したニュージランドのミルホルドサウンドの地域をミルホドトラックという山の歩き方でありましが、皆、トレッキングをするわけであります。ガイド達がご飯を作ってくれて、この山はこういう岩石で成立っておるとか、こういう植物群があるということを楽しく説明しながら4泊5日位で歩いて楽しむ、というような歩き方を真似して八甲田を中心に案内をしながら歩いてみる。それをもうちょっと大きくしてみれば、太平洋側から日本海までトレッキングしてみる。いわゆるゾーンのガイドができるような形で、新しい山の楽しみ方を作り上げられるのでないかという夢も彼等に託しながら、新しい青森での仕事を是非ここに根付けたいと思っております。

特に自然を愛するということでは皆様方と共通する部分を持っているわけでありますが、私どもは、職業として今から山に木を植えたり、治山工事に参加したり、また、木を切りに行ったりすることはとてはとてもできません。従いまして、もっと、もっと違った部分から参加することになるかもしれませんけれど、是非、皆様方と一緒に歩かせていただいて、山を守り、また育て、山をまた楽しんで行きたいと、常日頃、ガイド達とよくそういう話をしております。

話が前に戻りますが、今、私どもがやっている会社の仕事というのは、来年どうしたらよいか、再来年はどうしたらよいか、儲からないときはどうしたらよいかなど、日々、日々、そういうことばかりを考えてやっております。コンピューターを叩けば、「お前の営業所は儲かっているとか、儲かっていない」というように、毎日、毎日、儲かっているか、いないとかということばっかりやっております。人生がおかしくなってしまうのでないかという気がしてなりません。情けないことですが、学校を卒業してから毎日、毎日、儲かっているか、いないかばっかりやって来ている者がおりますれども、そういう者の頭の中は、完全に物質経済志向が脳味噌の中に全部しみ渡り、人を見る時、真の生きた人間として人を見ないで、儲けるための道具ぐらいしか人を見ていない者が私の会社に沢山おります。稼ぐ機械である人間しか価値がないと思っているのです。民間企業では毎日毎日、そのような形で日々を送って来ておりますので、私ぐらいの年代に成りますと非常に身も心も老化して、仕事が出来なくなってしまいます。従って、物が売れなくなっても、その結果、理屈が結構、理論装備として、こう言って来た

ら、こう言ってやろうということばかり考えている人間になっているものばかりです。やがて定年を向かえる間際になったら、どこか良い所がないかと考えるようになったり、会社に愛着がなくなって、本当に窓際で日向ぼっこしている者ばっかりが多くなって来ております。しかし、会社が儲かっている時は若い者がその分カバーしますから、窓際で新聞読んでいても目立たないけれども、昨今のように企業赤字が多くなると、その者は行く場所が無くなり、辛い末路が待っていることばかりです。しかし、儲ける機械になってしまった者は、木を愛するとか、こんないい石があるとかの感性ある日々の生活を見返すこともできなく、また、自分の趣味を求める時間ももはや持っておりません。このようなことを包括して申し上げますと、全く自分の時間を持たない生活を長い間やってきて、やがて58歳の定年を向かえ、会社を辞めて行く時、彼等に残されるものは何にもなくなってしまうのでないかと思います。私が選択した若い者と一緒に全財産を叩き売って、青森でもう一回生き直そうというこの方が、実に自然であるし、この生き方に間違いないと私は信じ会社内では大きな優越感を感じております。都会の人達から見れば、「どうせあいつは2～3年で潰れるのに勢がっている」という声も結構聞こえて来ますが、それもまた励みになります。

木を育て、森を育てて、山を治めて下さっている皆さん、こんな大きなロマンをお持ちになっている方々に、会社を辞めるとか、辞めないとかのちっぽけなスタンスで、ものをみている我々に対し、本当にロングスタンスでなければ成し得ない仕事に携わっている皆さんに、実に素晴らしい人生を教えていただき、また、壮大な男のロマンを感じさせて下さったことに感謝しております。このような仕事に携わっている皆さんと今日お逢い出来て、また、楽しいお話をこれからも続けていけることは、私にとっても大きな財産であります。どうぞこれからも本当の人間の生活に向けて警鐘を与えてくれる壮大なロマンを持って仕事をしている皆さんだからこそ出来得るので、これからも自然から学ぶ人間の真の生き方を教えていただき、そして若い者に信念を植え付けていただくことにより、きっと素晴らしい我々の次ぎの世代が、また、育ってくれると思います。是非、このことをお願いいたしまして、終わりたいと思います。